

【随筆・議員奮闘編】

年賀状は心をつなぐもの

今年も元旦に多くの年賀状を戴いた・・・

議員は公職選挙法で、選挙区内の有権者には、受信した年賀状に返信する形での賀状差出しが許されていない。元旦に配達されてから賀状を認（したた）める生活に入って早18年になる・・・

年賀状は、年に一度の消息の確認行為とも言える。一葉の賀状を手にとると、ありありと差出人とのあり日の情景が思い出される。恩師の賀状を手にとると、恩師の下で学業の機会を賜り、専門書を精読した銀座の日々の思い出が募る。

学生時代は500円もポケットにあれば了とし、共に青春時代を過ごした東京時代の友がきは健在だ・・・

帰坂して行政書士となり書士会役員会で、共に将来書士になるであろう後輩のためにと、行政書士業務の確保に勤しんだ仲間たち・・・

宅建業協会役員として、業者の社会的信用の確立に向けて共に行動をした仲間たち・・・

暇さえあれば、厚かましくお宅にお邪魔して碁を打ち、或いは様々な人生訓の教えを戴いたりした方々、若き時から厚誼を重ねた人々が、一葉の賀状となって、「元気かい」と呼びかけてくれる。途絶えることなく今日まで互いの心をつなぐ一縷の糸といえる・・・

賀状は頂いた枚数分、手に取るとそこには枚数分の交誼があり、過ぎし日々の思い出が映像として脳裡に蘇える。返信の為の賀状を認める時に、宛名を確認し、宛名人の健やかなるを念じてから筆をとるので、返書も中々はかどらない。然し戴いた賀状は、私にとって一葉一葉が将に宝珠である。

平成28年1月6日記す